３　次の文章は『更級日記』の一節である。読んで設問に答えよ。

〈北海道大〉二〇二〇年度出題

　その返る年の十月二十五日、のとののしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度のにて、田舎世界の人だに見るものを」「月日多かり。イその日しも京をふり出でて行かむも、いともの狂ほしく、ロ流れての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人は言ひ腹立てど、どもの親なる人は、「いかにもいかにも、心にこそあらめ」とて、言ふに従ひて出だし立つる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も  
ハいといみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ心ざしを、さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思ひ立ちて、その暁に京を出づるに、二条の大路をしも渡りて行くに、さきにみあかし持たせ、供の人々姿なるを、そこら、桟敷どもに移るとて行きちがふ馬も車もかち人も、「あれはなぞ、あれはなぞ」と、やすからず言ひおどろき、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。

　のと申しし人の家の前を過ぐれば、それ桟敷へ渡りたまふなるべし。広う押し開けて、人々立てるが、「あれはなめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「が目をこやして、何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。ニよしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」と、まめやかに言ふ人一人ぞある。

　道ならぬさきにと、夜深う出でしかば、立ち遅れたる人々も待ち、いとおそろしう深き霧をも少し晴るけむとて、の大門に立ち止りたるに、田舎より物見に上る者ども、水の流るるやうにぞ見ゆるや。ホすべて道もさりあへず。物の心知りげもなきあやしの童べまで、引きよきて行き過ぐるを、車をおどろきあさみたることかぎりなし。これらを見るに、げにいかに出で立ちし道なりともおぼゆれど、ひたぶるに仏を念じたてまつりて、宇治の渡りに行き着きぬ。

注　大嘗会の御禊――新天皇即位後に行われる大嘗会に先立って、十月下旬に天皇が賀茂川で斎戒する儀式。一代一度限りの神事で、当時の人々にとってこれを見物できることは貴重な体験であった。

初瀬の精進――初瀬寺に参詣するための準備として、身を清め不浄を避けること。

児どもの親なる人――作者の夫橘俊通。

浄衣――神事や祭礼の折に着用する白地の狩衣。

良頼の兵衛督――藤原良頼。藤原隆家の長男。

顕証――顕わではっきりと見えること。

法性寺――藤原忠平が延長三年（九二五）に建立した寺。

問１　傍線部ロ・ハ・ホを現代語訳に改めよ。

問２　二重傍線部イ「その日しも」には、発話者のどのような心情がこめられているか。副助詞「しも」に留意して五〇字以内で答えよ。

問３　二重傍線部ニ「よしなしかし」は、この場合どのような価値観を表した評言と考えられるか。五〇字以内で答えよ。

◎問４　問題文全体から読み取れる作者の葛藤を、七〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ロ＝Ａ後々まで伝わる話の種にもＢきっとなってしまいそうな

Ａ＝５〔「代々までの」など、また「語り草」「笑い話」なども可。〕

Ｂ＝５〔「なるにちがいない」「きっとなろう」なども可。〕

　　　ハ＝ＡたいそうひどくＢ見物したがっている様子であるのは、

Ａ＝２〔「いと」「いみじく」の二つともの意味が記されていなければ０。〕

Ｂ＝８〔「様子であるのは」は単に「のは」でも可。〕

　　　ホ＝ＡまったくＢ道も人を避けて通ることができない。

Ａ＝３〔打消の語と呼応する訳でなければ不可。〕

Ｂ＝７〔「よけて」などでも可。〕

問２　Ａほかにもよい日はあるのに、よりによってＢ大嘗会の御禊の日にＣ初瀬へ参詣に行くとはばかげているという心情。（50字）

Ａ＝３〔「その日に限って」という意味が明確でない場合は全体０。〕

Ｂ＝３〔「大嘗会の御禊の日」が明記できていなければ０。〕

Ｃ＝４〔「参詣・物詣でに行くこと」に対して批判的に記されていなければ全体０。〕

問３　Ａ参詣してご利益を得ることが大切で、Ｂ特別な儀式とはいえ一時の見物の享楽への執着は無意味だという価値観。（50字）

Ａ＝５〔「参詣」「物詣で」という内容に触れていない場合は減点３。〕

Ｂ＝５〔「見物」「享楽」という内容に触れていない場合は０。〕

問４　Ａ大嘗会の御禊に初瀬へ参詣することに対しＢ嘲笑や非難が多く挫けそうになる一方、Ｃ夫や道理のわかる人の賛同を支えに願いを成就させたいとも思っている。（70字）

ＢとＣのどちらかの内容がなければ全体０。

Ａ＝２〔「参詣」「物詣で」などの内容がなければ０。〕

Ｂ＝４〔「嘲笑」「非難」「あきれる」などの内容がなければ０。〕

Ｃ＝４〔「賛成する人々」に触れていなければ減点２。〕

【現代語訳】

　その翌年の十月二十五日、大嘗会の御禊（がある）と（世間が）大騒ぎをしているときに、初瀬詣での精進を始めて、その日京を出発すると、れっきとした人々が、「（大嘗会は）一代に一度の見もので、田舎で暮らす人でさえ見に来るのに」「（物詣でに出かけるに都合のよい）月日は多い。（それなのに）その日に限って京を振り捨てて出かけようとするのも、とてもばかげていて、　　問１ロ後々まで伝わる話の種にもきっとなってしまいそうなことです」などと、兄弟である人は言い怒るけれども、幼い子たちの親である夫は、「どのようにもどのようにも、（あなたの）心（の思うまま）であるのがよいだろう」と言って、（私が）言うことに従って出立させてくれた心遣いにもしみじみと心打たれた。一緒に行く人々も問１ハたいそうひどく見物したがっている様子であるのは、気の毒だけれど、「見物して何としようか（、いや何にもならない）。このようなときに詣でる誠意を、（仏は）いくらなんでもやはり（素晴らしいと）お思いになるだろう。きっと仏の御利益も現れるだろう」と決心して、その日の暁に京を出発したところ、二条の大路を渡って行くと、先頭にお灯明を持たせ、供の人々は（白い）浄衣姿である（私たち一行）を、多くの、桟敷など（見物のための席）に移動しようとして行き交う馬（上の人）も牛車（の人）も徒歩の人も、「あれは何だ、あれは何だ」と、不審そうに言い驚き、（また）あきれ笑い、嘲る者たちもいる。

　良頼の兵衛督と申した人の家の前を通り過ぎると、そちらも桟敷へお出かけなさるのであろう。門を広く押し開けて、人々が立っていたところ、（その人たちが）「あれは物詣でに行く人々であるようだなあ。（物詣でに出かけるにふさわしい）月日はこの世に多いのに（何も今日でなくても）」と笑う中に、どれほどに思慮深い人であろうか、「（御禊の見物で）一時の目を楽しませて、何としようか（、いや何にもならない）。ひどく（感心なことに）決心なさって、仏の御利益をきっとお受けなさるはずの人であるようだ。（それに比べて、一時の物見に執心する人々の様子は）無意味なことだよ。（私たちも）見物をしないで、このように決心すべきだった」と、真面目に言う人が一人いる。

　（旅の）道中人目にわではっきりと見える前にと、夜がまだ深いときに出発したので、（家を）出るのが遅かった人々も待って、たいそう恐ろしく深い霧も少し晴らそう（それから進んでいこう）と思って、法性寺の大門に立ちどまっていたところ、田舎から見物に上京してきた者たちが、水が流れるように（ぞくぞくとやってくる様子が）見えることよ。問１ホまったく道も人を避けて通ることができない。物の風情などもわかりそうもない賤しい子どもたちまで、（私たちが人々を）よけて行き過ぎるので、（その私たちの）牛車を（見て）驚きあきれている様子はひととおりではない。こうした様子を見ると、本当にどうして出発した旅の道であろうかとも思われるけれど、ひたすら仏を祈り申し上げて、宇治の渡し場に到着した。